

Kyoto 演劇フェスティバル講評
春楡一座「茶色の朝」「核と世界の子どもたち」

止むに止まれぬ想いがあって上演される作品だとしても、作り手が抱いている熱いエネルギーと同等の何かを持って観客が作品を見始める事はあまりない。ましてや、社会的な出来事を扱う作品の場合、観客の多くが独自の意見や見解を抱いている。作り手は、受け手の多様な感性や経験値を決して無視してはならない。

春楡一座による作品も、パンフレットを読む限り、止むに止まれぬ想いがあって上演されたようだ。しかし作品の随所で、その想いを伝える技術の拙さを私は強く感じた。技術の拙さは、そのまま作り手の想いの拙さと言い換えても良いだろう。手厳しい言い方だが、人前で何かを提示するとは、こうした意見も真摯に受け止める覚悟が無くてはならない。

拙い技量として最初に指摘したいのが、プロジェクターの映像の使用法である。和室でのプロジェクター使用という試みは歓迎するが、映写された文字が小さ過ぎる。これは単なる失敗である。また詩の朗読の後、その詩に関する写真が投影される場面があったと記憶しているが、その写真の投影時間が極めて短かった。おそらくスタッフのきっかけとして、仕方ない処理だったのだろうと思うが、そうであればまた別の方法を考えてもらいたかった。そして写真の使用自体に関しても、少し苦言を呈しておきたい。「核と世界の子どもたち」のラストは、六田友弘の写真集「時のアイコン」の写真をスライド形式で何枚も見せて行く方法だったが、こういった他ジャンルの作品の借用に関してはもっと細心の注意を払うべきである。あのような写真の使い方は、東日本大震災を単なる表層的なイメージとして消化してしまう悪しき例だと私は感じた。（写真集自体の評価はまた別である。）春楡一座の今回の上映に関して指摘すべき点はまだまだ多いが、冒頭に掲げた点に立ち戻り、以下の引用をして筆を置きたい。

われわれを思うままに泣かせたり笑わせたりするのは、自分自身を忘れている熱狂した人間ではない。それは己れに克つ人間に与えられた特典である。-ドゥニ・ディドロ

伊藤 拓（演出家）

春楡一座

竹橋 団（劇団京芸）

「茶色の朝」

今、日本は安倍政権によって憲法を変えて”戦争をできる国”へと国をかえようとつきすすんでいます。演劇とは、時事に対して創っていくものであると思っている（それだけではありませんが）私にはとても良い演劇でした。日本が「茶色の朝」のようにならないよう、生きていかないといけないと思います。演じられ方もシンプルで良かったです。ここをどうのと言う事はないんですが、その人物に、おもいきってふみこんで演じてもいいんじゃないかなと思いました。

「核と世界の子どもたち」

凄く衝撃を受けました。世界のどこでもこんな事があってはならない事なのに、今も苦しんでいる子ども達がいて、今これからもそんな子どもをつくってしまう方向に世界はすすんでいる。核はあってはいけない。核廃絶を希求します。

春楡一座の演じられた作品は、どの様に表現するかではなく、この事実をどう考え、心からどう思うかの一点につきると思います。三人で心をつき合わせて頑張ってください。